# 論文の内容の要旨

## 論文題目

## 発話行為における身体
## ――早期失明者と俳優を巡って

氏名　　佐藤 由紀

本論文は、Darwin(1859)以降発展してきた、ジェスチャーの起源や機能を問う研究の流れを受け継ぐ、プラグマティズム的心理学研究である。その目的は「自発的ジェスチャー(Kendon, 1986, 2004; McNeill, 1987, 2005)」を通して、早期失明者と俳優という対象を布置し、その実証的分析から、自発的ジェスチャーのもつ他者志向性を明らかにしようと試みたものである。ただし本論では、自発的ジェスチャーが他者志向性を内包していることを自明とはせず、早期失明者や俳優の自発的ジェスチャーの実証的分析からする逆照射によって、その他者志向性について検討をおこなった。以下、本論での「ジェスチャー」とは但し書きがない限り「自発的ジェスチャー」を指す。

その特色は、今までのジェスチャー研究でも取り上げられることの少なかった早期失明者の課題説明場面や、俳優の演技場面におけるジェスチャーを扱っている点であり、またそれらの多角的且つ実証的な分析結果から、ジェスチャーのもつ他者志向性を明らかにしようと試みた点である。しかし、対象となっているのは社会的な「対面相互行為場面(Goffman, 1959)」ではあるが、その範囲は限られている。つまり、本論内で検討した「ジェスチャーにおける他者志向性」とは、実験的ないし演技的場面における他者志向性である。そこで本論では、実証的分析結果から普遍的法則を求めるべく検討および考察をおこなうが、普遍的法則を求めることだけを一義とせず、「ジェスチャーの他者志向性」という問題を考

えるために考察しなければならないさまざまな要因や、検討しなければならない事象の豊穣さを提示することもまた、意義ある課題と扱った。

論文は 4 部 9 章から構成されている。

第 1 部「研究課題」は 1 章から成る。

まず、西洋を中心としたジェスチャー研究の歴史的変遷を概観し、心理学において「自発的ジェスチャー」が研究の俎上にあげられるまでの背景が探られた。その中で、ジェスチャー研究における大きな転換点の一つは、『種の起原』(Darwin, 1859)によって個体規模の発達ないし変化の可能性が示されたことであり、そのためヒトという種の普遍性が揺らぎ、ジェスチャーの起源が探索されるきっかけとなったことを明らかにした。その後 20 世紀に入り、人類学者の Kendon(1986, 2004)および心理言語学者の McNeill(1987, 2005)によって、それまで「有意味でない(Mead, 1934)」とされ、焦点のあてられることが少なかった「自発的ジェスチャー」の理論的意義が指摘され、自発的ジェスチャーを対象とした研究が研究領域の一分野と確立するまでを述べた。つづいて、本論の先行研究である発達の早期（3 歳以前）に失明した者（以下、「早期失明者」と表記）や俳優を対象としたジェスチャー研究および生態心理学におけるジェスチャー研究の現在までの動向を展望し、本論との関連を述べた。さらに本論の主な分析手法となる Kendon(1986, 2004)の構造的アプローチや McNeill(1987, 2005)のカテゴリカルアプローチについてその思想的背景を要約した。そして最後に、本論の目的と構成を述べた。

第 2 部「早期失明者における発話構造の探索」は 3 章から成る。

早期失明者に発話にともなう自発的ジェスチャーが出現するか否か、つまり、自発的ジェスチャーの出現に視覚経験が必要か否かは議論が分かれている（Iverson & Goldin-Meadow, 1997, 1998, 2001; 佐々木, 1993）。そこで第 2 部では、今までの議論を受け、成人の早期失明者における発話にともなうジェスチャーの現れを否定した佐々木(1993)の研究を下敷きに、早期失明者の発話場面の再検討をおこなった。具体的には、視覚経験の有無が「発話にともなうジェスチャー」に及ぼす影響について構造的およびカテゴリカルアプローチやビートのリズム分析を通して、検討をおこなった。第 2 章では晴眼者や中途失明者、早期失明児とのカテゴリー比較から、そして第 3 章では早期失明者の個別事例の時間的な構造の分析からそれぞれ検討をおこない、第 4 章で総括的議論をおこなった。

その結果、晴眼者ほど明確ではないが、早期失明者にも「発話にともなうジェスチャー」を見いだすことができた。また晴眼者や中途失明者らとの共通性として、以下の結果示唆された。

- 発現頻度は個人差がある
- ジェスチャーと課題の性質は一定の関連性をもつ
- ビートは独自のリズム性を保持している
- ビートは発話構造を示唆するという機能をもつ

しかし一方で、早期失明者の固有性として、以下の結果が示唆された。

- ジェスチャータイプの一種である「絵的表現」の出現がまれである

・ ジェスチャーの動きがきわめて小さい
・ 手の形が閉じる傾向にある

以上より、第 2 部では視覚経験がなくとも「発話にともなうジェスチャー」は現れるが、その発達は視覚経験によって大きく異なっていく可能性が示唆された。これらの結果は、従来の研究で「視覚」という単一モダリティと対になるような他者という存在を与件としていたことが問題となる可能性を示唆するものであった。そこで第 3 部では、単一モダリティと対になるような他者ではない、どのような他者の存在論的地位があるのか、という問いを立て、検討をおこなった。

第 3 部「俳優における発話構造の探索」は 3 章から成る。

第 5 章ではまず、分析対象となる俳優・イッセー尾形の一人芝居の作劇法とイッセー尾形を分析対象として取り上げる理由について述べた。次に、分析の拠りどころとなる「特定性」の概念(Holt, 1915)や、俳優の演技の「重層性(佐々木, 1994)」についてふれ、最後にイッセーの一人芝居『ニチゲイ』(2001)の開始 1 分間の発話構造を、視線やジェスチャーといった具体的な身体のレベルから分析し、考察をおこなった。その際、視線や発話の記法は、会話分析のエスノメソドロジー的記法(山崎, 1997; 水川, 2001)を、ジェスチャーの記法は構造的アプローチ(Kendon, 2005)を援用した。

その結果、以下の結果が示唆された。

・ 視線とジェスチャーが舞台上の「不在の環境(佐藤, 2004, 2006)」を秩序だって指示し、構造化するために重要な役割を担っている
・ 「視線>ジェスチャー」から「視線＜ジェスチャー」へといった構造の転換点は、舞台上のコミュニケーションの重層性の転換点を示している可能性がある
・ イッセーの演技がデビュー15 年（2000 年）を境に、「発話－動き－発話－動き」といった「交替技法」から「発話＝動き＝発話」といった発話の中に動きが埋め込まれている「合一体技法」へと変化している
・ 「合一体技法」は一人芝居においてイッセーが体得してきた巧みさの可能性がある

続いて第 6 章では、『ニチゲイ』内に現れるすべての発話構造について、特にジェスチャーを中心に詳細に記述、分析し、傾向性等について考察をおこない、つづく第 7 章では、俳優の発話構造との比較対象として、成人男性の課題説明場面における発話構造の分析、検討をおこなった。そして第 8 章では、俳優と成人男性の発話行為における身体の動きについて比較、考察をおこない、二者間のジェスチャー構造の共通性と固有性を探索した。

その結果、俳優と成人男性とのジェスチャーの共通性として、以下の結果が示唆された。

・ ジェスチャーの平均持続時間
・ ジェスチャーの出現位置および方向
・ ビートの独自のリズム性
・ ジェスチャーやビートの空間構造や時系列における関係

しかし一方で俳優の独自性として以下の結果が示唆された。

・1つの「ジェスチャー単位(Kendon, 2004)」に含まれるジェスチャー句数が少ない
・「準備(Kendon, 2004)」位相において成人男性はランダムな場所に手を置いていたが、イッセーは「手を身体に引き寄せる」ことが多い
・「指さし」を多用している
・右手も左手も同頻度で使用する
・右手にも左手にもジェスチャータイプが多様に出現している
・「ビート」のみが特定の形態素（フィラーや感動詞）と結びついてる

以上の結果のうち、成人男性との共通性は、イッセーが舞台上の「不在の(佐藤, 2004, 2006)」他者とコミュニケーションをおこなっていること、言い換えれば「内世界的(佐々木, 1994)」コミュニケーションへの妥当性を引き受けるものであり、一方イッセーの固有性は、イッセーが一人芝居という非自然且つ非対話的環境にいることを示唆するものであることを示唆している。またここで忘れてならないのが、イッセーのジェスチャーの固有性の一端として指摘した、指さしの多用である。Reed(1996)は、発達の初期に現れる指さしは、対話相手にむけたコメントと、状況にむけたコメントの区別をせずに成立し、その後、発達段階にしたがって多様な機能となっていくことを示した。イッセーの指さしの初出場面も、対話相手にむけたコメントと、状況にむけたコメントがないまぜになって出現していた。しかし最後の出現場面では、「要求」という単一の機能を果たす指さしをおこなっていた。このことは、イッセーがその指さしを、初めて出会う観客との場を発達的に生成するための手段として使用している可能性を示唆している。

最後に第4部「結論」は1章から成り、これまでの結果をうけ総括的議論をおこなった。その結果をまとめる。

(1) 発話にともなうジェスチャーの起源は視覚的他者に依存しないこと
(2) それは個体規模での「変化(Darwin, 1859)」の可能性があること
(3) ジェスチャーには「動的な時間過程に備わる固有性(佐々木, 2011)」があること
(4) その「固有性」にはさまざまな系があること

ジェスチャーの「固有性」を示す、その一例として「指さし」の発達的生成をあげた。

以上から、ジェスチャーのもつ他者志向性を考察したところ、少なくとも「他者」は視覚というモダリティのみに依存するものではなく、その発達的プロセスをみていくことで、初めて浮かび上がってくる固有の他者志向性があることが示唆された。そもそもジェスチャーとは、すでに伝えるべき「意味」がその形と運動に内包して現れている身体の動きである(McNeill, 1987)。そしてまた、演技だけではなくあらゆる「場面(福島, 2010)」においても変わらず、ジェスチャーはこうした多重な「意味」を内包している(Kendon, 2004)。Holt(1915)は「身体という機構が環境との関連を保ちながら実行することができるひとまとまりの行為」を「意図」とよんだ。本論文は「環境－行為系(佐々木, 2011)」としてジェスチャーを捉えることこそが、発話する身体の「意図」の一端をとらえられる可能性があることを示唆した。